2021.1.24　「神のふたりの証人のあかし」　黙 11:1-14

先週私たちは、「開かれた小さな巻き物」という題でみことばに聴きました。次週の箇所(11:15-19)を除いて、10 章から 14 章までは挿入箇所、つまり、物語りの進展ではなく、状況説明がなされていると見たわけですが、先週の 10 章では、雲に包まれて、天から降りて来た強い御使いについて、ヨハネは記したわけです。この御使いは、永遠に生きておられ、天地万物を造られた神様をさして誓いますが、その内容は、「第七のラッパの音が鳴り響くその日には、もはや時が延ばされることはない」というものでした。では、その時とは何のことか？それは神の奥義が成就する時、つまり、神様が預言者たちに告げておられた、この悪の世に対するさばきとキリストの再臨、それによってもたられる王国の設立が、その中心でありました。

その後、ヨハネは御使いからその巻き物を受け取って食べるのです。すると、御使いが告げた通り、それはヨハネの口には蜜のように甘く、腹には苦くなりました。巻き物、つまり、主のみことばは、神様に救いの望みを置く人には蜜のように甘いもの、なぜなら、悪に対する神のさばきがそこに記されているからです。けれども、罪人に対する神のさばきの厳しさ、恐ろしさを知るならば、それは苦いものとなります。ヨハネは、そのような経験を通して、再び人々について預言するよう語られるのです。そして、今日の箇所が続きます。

1-2 節「それから、私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があった。『立って、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。2 聖所の外の庭は、異邦人に与えられているゆえ、そのままに差し置きなさい。測ってはいけない。彼らは聖なる都を四十二か月の間踏みにじる。』」。ここで杖のような測りざおをヨハネに与えたのは誰なのか？前回の強い御使い、あるいは天から聞いた声の持ち主か、それはわかりません。ただ、このことが神様から出ていることは確かです。

この「杖のような測りざお」とは、ヨルダン川の岸辺に育つ葦(Reed)だといわれます。というのも、聖書時代には、長くて、軽くて、堅い葦（成長すると 6 メートルほどになる）が測りざおとして使用されたからです。では、ヨハネがそれで測れと命じられた聖所と祭壇とは、どこにありましたか？彼が黙示録を書いた時、エルサレムには聖所、つまり、神殿はあったでしょうか？いいえ。なぜなら、紀元 70 年、エルサレム神殿はローマによって破壊されたからです。ですから、その時から今日までエルサレムには神殿はありません。現在そこに建っているのは、イスラムの黄金のドームです。では、ヨハネが見た神殿はいつのものなのか？それは第三神殿といわれ、大患難時代の前半のどこかの時点で建てられると考えられています。

では、聖所と祭壇を測るとは、どんな意味があるのでしょうか？「聖所」とは祭司だけが入れる空間のことで、聖所と至聖所からなっています。また祭壇とは、聖所の外に置かれたもので、ユダヤ人は犠牲のいけにえをもってそこに近づくことができました。「そことそこで礼拝している人の数を測れ」ですから、大患難時代において、そこで礼拝をささげている人々を吟味するということでしょう。「測る」という行為は、所有権を表す行為ですから、神様が彼らのことをご自分のものとして見ておられることがわかります。ただ、それはさばきと関連性のある行為でもあります。つまり、この時、そこで礼拝をしている人々は、主イエスを無視したユダヤ教の礼拝をささげていますから、それが彼らの霊的状態、背教の姿を表しているのです。彼らには、キリストの福音、主を証する者、彼らを悔い改めに導く人が必要でした。

ただ、そこには「測ってはいけないもの」もありました。それは「聖所の外の庭」です。そこは異邦人に与えられていたので、測ってはいけないといわれています。この異邦人とは、神様を礼拝しない人々、つまり、不信者たちのことです。なぜ彼らを測ってはいけないのか？それは、彼らが聖なる都を四十二か月の間踏みにじるからです。また後で見ますが、「聖なる都」とはエルサレムのこと、四十二か月とは三年半のことです。つまり、大患難時代の後半に反キリストとその勢力は、エルサレムを踏みにじる(蹂躙)ようになります。

そのことが他の箇所でも預言されています(2 テサ 2:4、マタ 24:15-16、ダニ 9:27、12:11)が、反キリストは、七年間の中間で、イスラエルとの平和条約をやぶり、自分が神だと宣言しするのです。そして、自分の像(荒らすべきもの)を神殿の中に安置し、それを拝むよう人々に強います。ですから、主は異邦人を測ってはいけないと言われました。それは、神様が聖なる都を踏みにじる彼らを拒否しておられるということでしょう。

3節「それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと、彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する」。このふたりの証人とは、誰のことか？ここも意見がわかれるようです。この「わたし」とは、父なる神様とも主イエスとも理解できますが、このふたりの証人は、特別主に立てられることで千二百六十日の間預言します。「千二百六十日」とは三年半ですが、それが患難時代の前半か後半かはわかりません。流れからすると、後半のようにも思えますが、先ほどのエルサレムにおけるイスラエル人の霊的状態、また十四万四千人のイスラエル人の世界宣教からすると前半のことと思われます。判断の難しいところです。ただ、どちらにしても、彼らが荒布を着て預言することは確かで、荒布とは嘆きの象徴ですから、彼らは、神のさばきが近づいていることを告げ、人々に悔い改めて主を信じるよう迫ったと思われます。そして、その活動は、世界宣教を行う十四万四千人のユダヤ人とは違い、エルサレムに限られているようです。では、彼らはいったい誰なのか？

4-6節「彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。5 彼らに害を加えようとする者があれば、火が彼らの口から出て、敵を滅ぼし尽くす。彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。6 この人たちは、預言をしている期間は雨が降らないように天を閉じる力を持っており、また、水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもって地を打つ力を持っている」。

この「二本のオリーブの木、また二つの燭台」とは比喩的表現です。ゼカリヤ4章を見ると、そこでは燭台はイスラエルのこと、その燭台に油を提供する二本のオリーブの木は、総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアであることがわかります。ただ、このゼカリヤの幻の究極的成就は、大患難時代にやって来ると考えられているのです。つまり、今日のこのふたりの証人がそれであるというわけです。彼らは聖霊に満たされたオリーブの木で、患難時代においてエルサレムの霊的暗闇を照らす燭台(光)、神の真理(福音)を証する働きをします。

彼らについては、イスラエルと教会、旧約聖書と新約聖書と比喩的に解釈されたりもしますが、モーセとエリヤだと考える人もいます。なぜモーセとエリヤなのか？それは彼らが行う力によります。つまり、「雨が降らないように天を閉じる力」はエリヤ、そして「水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもって地を打つ力」はモーセが、神のさばきとして行ったことです。ただ問題としては、彼らはこの後、殺されます。すると、モーセは二度死ぬことになるので、それはおかしいというのです。ですから、モーセではなく、エリヤのように生きたまま天に上げられたエノクをそこに持ってくる人もいるようですが、それは無理があります。ということで、彼らのことは、患難時代に神様がイスラエルを救うために立てられた者とするのがよいでしょう。「ふたり」とは、ユダヤでの証言が、二人以上であるところに基づいていると思います。

彼らは、そのような力を持っているので、預言する間、彼らに敵対する者はありません。なぜなら、すでに見た力に加え、もし彼らに害を加えようとする者があれば、彼らの口から火が出て、彼らの敵を滅ぼし尽くすからです。「彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される」と書かれてある通りです。では、実際に彼らの口から火が出たのか？というと、そこは理解し難いところです。「火」は、神の怒りを表しますから、それがどのような形であれ、彼らに敵対する者には主の怒りが下されるということができます。ただ、エリヤが天から火を下したのも事実です(Ⅱ列1章)。ですから、その可能性も否定はできません。

7-8節「そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺す。8 彼らの死体は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされる。彼らの主もその都で十字架につけられたのである」。神様から与えられた力をもって預言をした彼らですが、あかしを終えると、つまり、その務めを果たし終えると、彼らは殺されてしまいます。誰によってですか？「底知れぬ所」から上って来る獣によってです。この「底知れぬ所」とは、以前見たアビス(アブソス)のこと、つまり、悪霊たちが捕らえられている所です。そこから獣(反キリスト)が上って来ることで、彼らを殺すのです。

そして、その死体は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされます。この大きな都とはどこのことですか？「彼らの主もその都で十字架につけられたのである」とありますから、エルサレムのことです。では、なぜエルサレムが、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都(大いなる都)なのか？ソドムとは性的な罪を象徴する町であり、エジプトは神の民を迫害した国です。つまり、人間的には、この時のエルサレムは大いなる都とされますが、霊的状態は、ソドムやエジプトのように神に背く堕落した状態にあることを示しています。

9-10 節「もろもろの民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめていて、その死体を墓に納めることを許さない。10 また地に住む人々は、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を贈り合う。それは、このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめたからである」。もろもろの民族、部族、国語、国民に属する人々とは、全世界の人々のことですが、彼らはどうやってその死体をながめるのでしょうか？以前は考えられませんでしたが、今ではインターネットの普及で、それが可能となりました。

では、なぜ彼らは「ふたりの証人の死体を墓に納めることを許さない」のか？それは、そのことが聖書で禁じられている軽蔑の行為だからです(申 21:22-23)。彼らは神様を憎む者です。そして、このふたりの証人は、預言(あかし)と力あるわざをもって「地に住む人々」、つまり、不信者を苦しめたわけですから、人々は彼らの死体をさらします。それだけでなく、彼らは喜び祝って、互いに贈り物を贈り合うのです。どれほど彼らを憎んでいたかがわかります。ちなみに、黙示録で不信者たちが喜ぶのは、ここだけです。

11-14 節「しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らに入り、彼らが足で立ち上がったので、それを見ていた人々は非常な恐怖に襲われた。12 そのときふたりは、天から大きな声がして、『ここに上れ』と言うのを聞いた。そこで、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。13 そのとき、大地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のため七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。14 第二のわざわいは過ぎ去った。見よ。第三のわざわいがすぐに来る」。

神を憎む不信者たちが喜んだのも束の間、彼らの予期せぬことがその後に起こりました。つまり、三日半の後、神から出たいのちの息が入ることで、死んだはずのふたりの証人が自分の足で立ち上がったのです。それを見た人々は非常な恐怖に襲われます。すると、天から「ここに上れ」という大きな声があり、ふたりは雲に乗って天に上るのです。そのとき大地震が起こって、都、つまり、エルサレムの十分の一が倒れ、七千人が死にました。この人々が誰であったかはもちろんわかりません。ただ、この時のエルサレムは反キリストの勢力に踏みにじられた状態ですから、その指導者たちであった可能性が多いに考えられます。一方、そこで生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめるのです。この「天の神」とは、聖書では神様と偶像を区別する際に使われる用語ですから、ここでは「獣」、つまり、反キリストへの礼拝との対比がなされています。

実は、この 11 章はさまざまな解釈がなされてきたことから、難解な箇所だといわれているようです。ただ、たとえ詳細がわからなくとも、全体的に何が起こっているかは理解可能だと思います。そこで皆さんにお聞きしますが、なぜ神様は、大患難時代にこのふたりの証人を遣わされるのでしょうか？彼らは地に住む人々を苦しめたというわけですが、地に住む人々はどのように苦しめられるのですか？それはこのふたりの証人が、嘆きの象徴である荒布を着て、神のさばきが下ることを告げ、人々に罪の悔い改めを迫ることによってです。

罪が示されること、それは確かに苦しいことです。それに対する神のさばきが行われるなら、苦しみは避けられないでしょう。では神様は、地に住む人々を苦しめるために、このふたりの証人を遣わされたのですか？もしそうであるなら、このようなさばきではなく、不信者はみな、さっさと地獄に投げ入れて、そこで昼も夜も永遠に苦しめたらよいのではないですか？にも関わらず、なぜ神様はその前に、このような機会を与えられるのですか？それは、大患難時代においても罪を悔い改めて救われる人が起こされるためです。そして、そのためには彼らのような証人が必要です。彼らは大患難時代において活躍しますが、今の時は、私たち教会にその使命が与えられています。ですから、私たちは自分にも他者にも福音を語り続ける必要があるのです。

この世で受ける苦しみは、神の永遠のさばきの苦しみに比べれば、軽いものです。けれども、人はそれを反対に見ることで、神様を侮ります。そして、この世においてわが道を進む、つまり、自分の欲(望)に導かれて歩むのです。けれども、神の怒りは、必ずそのような人の上に下されます。そして誰もそこから自力で逃れることはできないのです。ですから、神様は、ご自分のひとり子をこの世に遣わして下さいました。主イエスは、私たちの罪をすべて代わりに負うことで、十字架にかかり、神のさばきをその身に受けて下さったのです。その身代わりの死によって、私たちの罪は赦されました。そして主は、三日目によみがえられたのです。それはご自分を信じるすべての者に永遠のいのちを与えて、神の子とし、天の御国を相続させて下さるためです。この神の救い主だけが、私たちを神の御怒り、そのさばきと永遠の滅びから救うことができます。彼の名を呼び求める者、彼に信頼する者は、必ず救われるのです。今は恵みの時、救いの時です。